２０２３年１０月１５日　青戸教会　召天者記念礼拝「神の国が来るためには」

聖書　創世記６章５～８節、ルカ福音書１７章２０～３７節、　　高橋克樹牧師

ファリサイ派の人々がイエスに、「神の国はいつ来るのか」と尋ねた際に、イエスは「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と答えています。この「あなたがたの間にあるのだ」という言葉は、神の国を自分が入っていく特別な場所という無意識の前提を根底から覆すものです。ファリサイ派の人たちが抱いていた神の国のイメージは、神が信仰者たちに用意した理想の場所であることを前提にした質問です。具体的には、ローマ帝国に支配されているユダヤの社会を、その支配から解放してくれるメシアが来て、神が支配する国が樹立する時がいつ来るかと問うているのです。さらに「いつ来るのか」と尋ねていることからわかるように、早く来てほしいと願っていたのです。「いつ来るのか」という問いは、例えば、礼拝の説教が長い時に、「いつ終わるのか」と思うことを考えてみるとわかりますけれども、「早く終わらないか」という気持ちが現れているのです。つまり、早く神の国が来てほしいとファリサイ派の人たちは考えていたから、イエスに質問したのです。

けれどもイエスは、神の国はあなたがたの間にあるというのです。つまり、どこか遠くにある桃源郷のようなものではなく、今、私たちが生きているこの現場にあるんだと言っているのです。テレビの刑事ドラマの「踊る大捜査線」で織田裕二が「事件は会議室で起こっているんじゃない。現場で起きているんだ」という有名なセリフがありましたが、それになぞらえて言うならば、神の国はどこか遠くの桃源郷にあるのではない。あなたがたが生きている現場にあるのだ」ということをイエスはここで言っているのです。

しかも、「神の国は見える形では来ない」と言っています。神の国が信仰者たちに見える形で立ち現れるものではないということは、神の国は人間の眼に見えるようなものではないということです。これは、神の国が何か実態のあるものではないということを示しています。つまり、神の国とは神が支配する現場だということです。神の主権が、歴史の一コマ一コマに、そして自分が生きている現実の現場に、神の意志が現わされているのだけれども、その恵みの事実に私たち人間は気づいていない場合が多い。多くの場合、それは目に見えないので気づくことができないのです。けれども、神は恵みの業という形で私たち人間に導きを与えて、私たちの生きる現実を形作っているのです。ところが、この導きがもたらされていることを私たち人間はなかなか気づくことができない。私たち人間には、今自分が直面している苦しい事態に、とても神の意志が現わされているとは思えないからです。自分が苦しくてやりきれない現場に立っていたとしたら、悲しい現実に圧し潰されるような事態に遭遇していたとしたら、その現実にとらわれてしまい、とても神の導きの中で生かされているとは思えないからです。

しかし、イエスは神の支配があなたがたの間にあると言うのです。本日は召天者記念礼拝として礼拝をささげています。先ほど天に召された聖徒たちのお名前を読み上げましたが、これらの方々は、全員がクリスチャンではありません。でも、全能の神から見れば、家族がクリスチャンになったことで、その祈りの中で神の祝福を天にあって今受けておられるのです。私の両親も未信者ですが、聖徒たちの仲間入りをさせていただきました。神の支配が私たちの信仰によって、すべての人に及んでいるからです。私たちクリスチャンがつくり営む関係性こそが神の国の表れなのです。

キリスト教の葬儀では、召された方がこの世でどれほど名誉ある生き方をしたとしても、この世的な価値観でその方の生涯を総括することはありません。そうではなく、どのような神の導き

の中で生きてこられたかを総括するのです。キリスト教の歴史では、初期の頃に、死後洗礼ということが行われたことがありました。未信者のまま召された人のために、家族や身近な者が代わりに洗礼を受けるのです。そのことによって、死者も救いに預かることができると考えたからでした。これは現在では行うところはほとんどありませんが、全能の神に救いを求める一つの形なのです。

イエスは神を愛し、隣人を愛することを教えられました。これに対してファリサイ派の人たちは、隣人とは誰ですか、と問い返しました。それに対してイエスは「あなたは誰の隣人になるのか」と答えたのです。「隣人」の範囲を限定し、内と外とを分けようとする私たちの心の動きに対して、イエスは違うと言ったのです。つまり、隣人は「ある」ものではなく、「なっていく」ものだと考えられたのです。神の国の境界線は、私たちクリスチャンから始まって、私たちの身近な者、知人へと広がっていくものなのです。ですから、私たちは天国で愛する者と再会するためにも、地上にあっては召された親しい者を神にお委ねするのです。もちろん、今日ご出席の方で未信者の方はおられます。その方は、今は天にあって永遠の命を受けておられる聖徒たちが神の祝福に預かるようにと、地上にある者たちのことを祈っておられることも覚えたいと思います。

さて、本日の聖書個所の後半部分は難解な個所です。22節以下でイエスは弟子たちに向かって語り始めます。ここに「人の子」という言葉が出てきますが、これはメシアのことで、具体的にはイエス・キリストのことです。弟子たちはメシア到来の時を一度でも実際に目で見たいと望むだろうが、見ることはできない。終末が訪れる時にメシアも現れるが、このメシアは必ず多くの苦しみを受け、排斥される。ノアの時代にように、人々が平和な日常を送っていたとき、突然洪水が襲ってきてすべてを滅ぼしてしまった。ロトがソドムから逃れた時も、火と硫黄によってすべてを滅ぼしてしまった。これらの故事に倣って、メシアが現れる時もそれと同じようなことが起こるというのです。

ルカ福音書が書かれた時代は、ローマ帝国に試合されていた時代ですから、その暴力的な支配が早く終わりを告げるために、この世に終末が来ることをユダヤ人たちは願っていたのです。しかも、どのような時代にあっても同じですが、そのローマ帝国の支配に迎合するユダヤ人たちもいたわけです。ですから、すべてが滅ぼされて、すべてが一新される必要があると考えられていたのです。だから、神の国の到来という形での、神の絶対的な支配が確立する時が来ることを待ち望んでいたために、終末が待望されていたのです。ただ、それは終末が来ることによってローマ帝国の支配に終止符が打たれることを他力本願的に待つ姿勢から生まれた考え方なのです。

けれども、イエスは「神の国はあなたがたの間にある」と言われたように、神の支配を実現させるようにするのは、神の意志に加えて、私たち人間なのです。神の国は、「ある」ものではなく、私たち人間によって「造り出されていく」ものなのです。もちろん、私たち人間の力は小さく、限定的なものです。神の支配をこの世に確立させていくには、非力なものです。けれども、まずは自分の人生にこれまでどのような神の導きが示されてきたのかを検証することで、私たちは神の恵みの力に気づかされます。この神の力に気づかされた者が、神の意志がこの世に実現することの一翼を担う者となることできるのです。

神の国が来るために私たちができることは少ないかもしれません。でも、神の導きを受けた者がその働きに招かれているのです。